

00万円。国が定める基準額の2倍を超えた。それでも雨漏りや結露などの苦情は絶えない。8月8日、県は仮設住宅の改善に、73億円の補正予算を計上した。

岩手県をはじめとする被災3県は短期間に大量の仮設住宅を供給するため、プレハブメーカーと住宅メーカーがつくるプレハブ建築協会に発注。完成を急いだことが欠陥住宅を生み出した。そのうえ3県には協会に加盟する企業がほとんどなく、仮設住宅の建設が経済再建や雇用創出につながることもなかった。

そのなかで岩手県では、1万4000戸の約2割を県内業者が受注した。その理由を住田町の多田欣一町長は、次のように語る。

「住田町が震災直後に第三セクターの住田住宅産業に木造仮設住宅を発注したことに注目し、県は2500戸を県内企業に分割発注した。これは住田町の決断が一石を投じた結果だし、仮設住宅の建設は地元の仕事にもやれることが証明できたと思っています」

住田町の木造仮設住宅1棟の価格は250万円。浄化槽などの付帯工事を入れると300万円前後になった。建設費3億円のほとん

どは町内に還元され、その費用は音楽家の坂本龍一さんが代表をつとめる森林保全団体 more trees が集める寄付でまかなわれる。

「仮設住宅はプレハブ」という常識をくつがえした木造一戸建て。しかも津波の被害を受けなかった内陸部の住田町が、沿岸部の被災者のために建設したとあって、多くのメディアで報道され、広く共感を集めた。そのため、木造仮設住宅は東京の六本木ヒルズでの展示を皮切りに山梨県各地を巡回してふたたび東京に戻り、銀座のソニービルで常設展示される予定だ。

企業や市民団体による支援の申し出も後を絶たない。自然エネルギーの普及をめざす団体のネットワーク「つながり・ぬくもりプロジェクト」は太陽熱温水器と、太陽光発電による街路灯を設置。新潟県の企業から暖房用のペレットストーブも寄贈される予定だ。

入居者の満足度も高い。

「木目の美しさに癒されます」と本町団地に住む吉田ミエ子さんは目を細め、同じ団地の菅原教文さんは次のように話す。

「ここに来てから、朝まで熟睡できているので、熱がこもらず、エア



どの家庭でも自宅前のわずかなスペースを生かして花を飾り、野菜を育て、手入れを楽しみながら自らを癒している。同じ建物が建ち並ぶ仮設住宅にも住む人の個性が出てきた



木造仮設住宅で新しいコミュニティづくりが始まった

前号で紹介したとおり、津波で大きな被害を出した岩手県陸前高田市、大船渡市に隣接する住田町は、震災4日後に単独予算で地元産材を使った木造仮設住宅建設を決断。5月末には全棟が完成した。沿岸部から入居した被災者は、いまそこでどんな暮らしを送っているだろうか。夏まつ盛りの住田町を訪ねた。

文・写真=佐藤由美

常識をくつがえした木造一戸建ての仮設住宅

外壁に並べたプランターに色あざやかな花が咲き誇り、ゴーヤやミニトマトなどの夏野菜が実る。岩手県住田町の木造仮設住宅には、新居を快適な場にしようとするとする入居者の工夫があふれていた。

岩手県内の仮設住宅の建設は、目標とするお盆の直前、8月11日に終わった。水道などの付帯工事を含めた1戸あたりの価格は約5

コンもいらぬ。2年後に移築して、このまま住み続けたいくらいです」

「入居が終わりではない。ほんとうの支援は入居後」

町内3カ所に点在する仮設団地には、住田町に隣接する陸前高田市と大船渡市、それに大槌町の3自治体から93世帯が転居してきた。261人はすがすがしい杉の香りを放つ小さな新居に身を寄せ、長い避難所生活を終えた。

陸前高田市の中心部、高田町に住んでいた菅原教文さんは、出張先の一関市で被災した。いつもなら1時間の道のりを4時間かけて帰り着くと、生まれ育ったまちは消えていた。家族の避難場所と決

めていた妻の勤務先の特別養護老人ホームに駆けつけ、妻と2人の子どもに再会。だが、そこに両親の姿はなかった。一家は、避難所となったこの施設でそのまま2カ月を過ごす。

両親を亡くし、自宅も車も流された。勤務していた老舗酒造会社「酔仙酒造」は壊滅。社員57人のうち7人が命を落としたり、「これ以下はない」といってどん底を見た菅原さんを失意の底から救ったのは、全国の取引先からの応援だった。支援を申し出る携帯電話は鳴り止まない。何もいらないと告げても食料や衣類などの支援物資が届き、礼状を書き送るとまた送られてくる。

「それがほんとにうれしくて……」



陸前高田市だけでなく、岩手県を代表する銘酒「酔仙酒造」に勤務している菅原教文さんは、全国の取引先から避難所に寄せられた支援物資の送り状をいまま大切に保存している